

ウズベキスタンのマハッラ(地域共同体)と子どもの 社会化：イスラームを核とした社会性の習得と文化 継承に焦点を当てて

河野, 明日香
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/15669>

出版情報：飛梅論集. 8, pp.17-36, 2008-03-31. Graduate School of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ウズベキスタンのマハッラ (地域共同体) と子どもの社会化

— イスラームを核とした社会性の習得と文化継承に焦点を当てて —

河 野 明 日 香*

はじめに

ウズベキスタンの子どもたちは、生まれた瞬間から様々な通過儀礼や伝統的祭礼を通じ、成長していくが、そのような儀礼には、イスラームを基盤としたものが少なくない。

例えば、ムスリムの家庭において男児に施される割礼 (*sunnat to'y*) は、結婚式並みの規模で盛大に祝われる。割礼の前後には親戚や近隣住民などのお客に料理が出され、その際にマハッラ (*mahalla*) と呼ばれる伝統的地域共同体の住民の参加が不可欠となっている¹⁾。隣国カザフスタンでは、衛生上の理由から割礼が必要とも考えられているが、男性になりムスリムになる儀礼として重要視されている²⁾。

このように、子どもたちは割礼や命名の儀礼、誕生後の儀礼などの多様な通過儀礼を経ながら成長し、一人前の大人と認められるようになる。しかし、命名の儀礼やゆりかごの祝い (*beshik to'y*)、割礼などは、両親や親戚、マハッラ住民が子どもの健やかな成長や人生の幸福を祈り行うものであり、また、地域内における自身の社会的体裁を保つためのものでもあるなど、「上からの働きかけによる儀礼、大人から与えられる儀礼」という側面も有する。このような幼年期の子どもに対する儀礼では、当然ながら子どもたちの自発性、主体性はあまりみられない。子どもたちは自身に対する儀礼よりも、むしろ弟や妹、親類、そしてマハッラ内住民の中で行われる子どもたちに対する通過儀礼への参加を通じ、成長していくといえるのである。

以上のような幼年期の子どもに対する儀礼とは対照的に、子どもたちがより自発的・主体的に社会性や伝統文化、イスラームを習得する機会であるといえるのが、結婚式や葬儀、ラマザン (断食) やラマザン・ハイト (*ruza hayit*, 断食明けの祭り)、コルボン・ハイト (*qo'rbon hayit*, 犠牲祭) などの宗教的儀礼や行事である。子どもたちは、マハッラ内での多彩な儀礼への参加を通じ、宗教や伝統文化そのものを学ぶだけでなく、子ども社会や大人社会における人間づきあい、規律、習慣などを学ぶのである。

自分が生活する社会の規範や価値、独自の文化などを学び習得する過程は社会化と呼ばれるが、その過程にはそれぞれの社会構造や宗教的伝統、伝統文化、自然環境などが多大な影響を及ぼしている。ウズベキスタンの社会においても、子どもの社会化過程は同国の宗教的伝統、自国文化に多

*九州大学大学院博士後期課程3年

くを依拠しているといえる。それに加え、マハッラを中心とした社会構造も、子どもの社会化の過程や各人の子どもの育て方に影響を与える重要な社会的・文化的要因として作用していることが予想されるのである。

特に、一般的な日常生活ではなく、非日常的な儀礼の場での子どもの行為には、イスラームを背景とした何らかの規範や価値、ジェンダー、エスニシティ、世代、時代などの多種多様な社会的制約が鮮明に現れやすい。それに加えて、現在の文化政策や教育政策上で、大統領令により豪華な祝事が制限されたり、割礼やラマザン、ナウルーズ、伝統的なウズベク式の結婚式などが学校教育に導入され子どもたちに教えられていたり、ウズベキスタンのNGOが自国文化の復興をアピールする会議や夏期講座を開催したりという外部要因が、儀礼における子どもたちの行為にも様々な影響を及ぼしていることが推測される。

本稿では、そのようなウズベキスタンの文化的宗教的背景や社会構造を踏まえ、マハッラにおける伝統文化やイスラームを基盤とした子どもの生活の諸相を考察することで、以下の点を明らかにしたい。①子どもの生活のなかでも、特にラマザン・ハイド、コルボン・ハイドでのケリン・サロム (*kelin salom*, 花嫁挨拶) といった宗教儀礼における子どもの社会化や文化継承の過程はどのようなものであるか、②宗教儀礼を通し、マハッラが子どもの社会化や文化継承にどう関与しているのか、の2点である。

まず、本稿ではウズベキスタンのマハッラにおける子どもの生活について、マハッラ内におけるノンフォーマル教育と並立して、近代学校制度の拡充が開始された帝政ロシア期、社会主義国家建設の一端としてマハッラが利用されたソ連期、そして独立後のマハッラ復興政策が顕著である現在の3期に分類して概観する。

続いて、子どもたちの主体的・自発的学びがより顕著であるといえる結婚式や葬儀、ラマザンなどの儀礼のうち、タシュケント市内の家庭のラマザンにおけるフィールドワークに触れながら、とりわけラマザン・ハイトとコルボン・ハイトのケリン・サロムにおける子どもの社会性習得や文化継承の過程について考察する。また、各儀礼にマハッラがどのように関係しているかについても検討を行う。

最後に、マハッラにおける子どもの社会化や文化継承は、マハッラ内の儀礼を通じどのように行われているのか、その過程における「支援者」、「介入者」としてのマハッラの活動を明らかにし、今後の課題を考察する。

本論での記述の中心となるマハッラにおける通過儀礼やイスラーム文化、学校教育制度に関しては、主としてスーハレワの記録した19世紀末から20世紀初頭におけるブハラ的事例、ムミノフ編集によるサマルカンドの事例、およびベンドリコフによる20世紀初頭のタシケントにおける記述に加え、現在の関連論文、マハッラと各家庭における参与観察、聞き取り調査を基に構成している。

研究の方法としては、文献分析、マハッラ運営委員会とその他諸団体関係者へのインタビュー、宗教行事や初等・前期中等教育段階の子どもを持つ家庭での参与観察、両親へのインタビューなどを採用した。

1. ウズベキスタンのマハッラにおける子どもの生活

ウズベキスタンの子どもたちは、家庭だけでなく幼稚園や初等・中等学校などの国立教育機関や様々な社会団体が企画・実施する活動、マハッラでの活動に参加することにより社会化される。

ここでは、マハッラにおける子どもの生活について、現代マハッラの機能と構造や学校教育にも触れながら、帝政ロシア期とソ連期、独立後に分類して概観したい。

(1) 現代マハッラの機能と構造

マハッラはアラビア語源の言葉であり、「人々の居住する地区を基盤として形成されるいわば『ご近所』型のコミュニティ」³⁾、「『イスラム都市』の街区」⁴⁾、「古くに中央アジア地域の定住民によって形成された地域共同体であり、社会構造内の地域行政の一形態」⁵⁾などの様々な定義がなされている。これまでの先行研究による多様な定義を統合すると、マハッラは中央アジアなどのムスリム社会に存在する、生活に密着し、住民の生活を支える街路から形成される地域社会の一単位であるといえる。

ソ連解体後には、共産主義のイデオロギーやソ連期の国家体制からの脱却を図るため、各民族の伝統や価値、アイデンティティへの回帰という動きが盛んになった。それと同時に、政府のマハッラへの支援が増大し、その社会的行政的基盤も強化されるようになった。以前は、立ち遅れた存在として近代化が推進されたマハッラが、独立後、国家行政を支える末端機関として再浮上するようになったのである⁶⁾。近年では、政府は大統領令により2003年を「マハッラの年」と定め、「私たちは皆、マハッラで生まれる」、「マハッラは私たちの社会的政治的な鏡である」といったスローガンを発表するなどし、マハッラの重要性を訴えるキャンペーンを行っている⁷⁾。

現在、ウズベキスタンのマハッラはモスクや学校、住民集会、マハッラ運営委員会、マハッラの代表、事務所や式場などの共同使用施設、自警団、そして、そのマハッラに住む各家族などの相互関係により構成されている。マハッラの基準としては、500世帯以上の居住が政府の方針により求められている。マハッラの代表は選挙で選出され、政府から給料を支給される。代表は、家庭内不和の解決、マハッラ財政の再建や支援の確保、マハッラ運営、マハッラ内の各種施設の整備など様々な活動を行い、その具体的活動は各々の代表の経歴や家庭状況によって異なるとされる⁸⁾。

例えば、筆者が調査を実施したあるマハッラでは、マハッラの代表がいくらかの資金を出し、子どもや青年のスポーツ振興を強く推進していた。代表が、「スポーツがこのマハッラのオリジナリティ」と語るほどの熱心さであった⁹⁾。また、別のマハッラでは大学で情報学やITについて教えていた代表が、マハッラ内の住民に関するデータベースをコンピューターで作成し、マハッラ運営に活用していた¹⁰⁾。

各マハッラには、行政機関として具体的活動を行うマハッラ運営委員会が存在し、その下に下部委員会が置かれている。下部委員会は「道徳・教育」、「女性」、「社会保障」などに分かれ、各々の担当分野で多様な活動を実施している¹¹⁾。

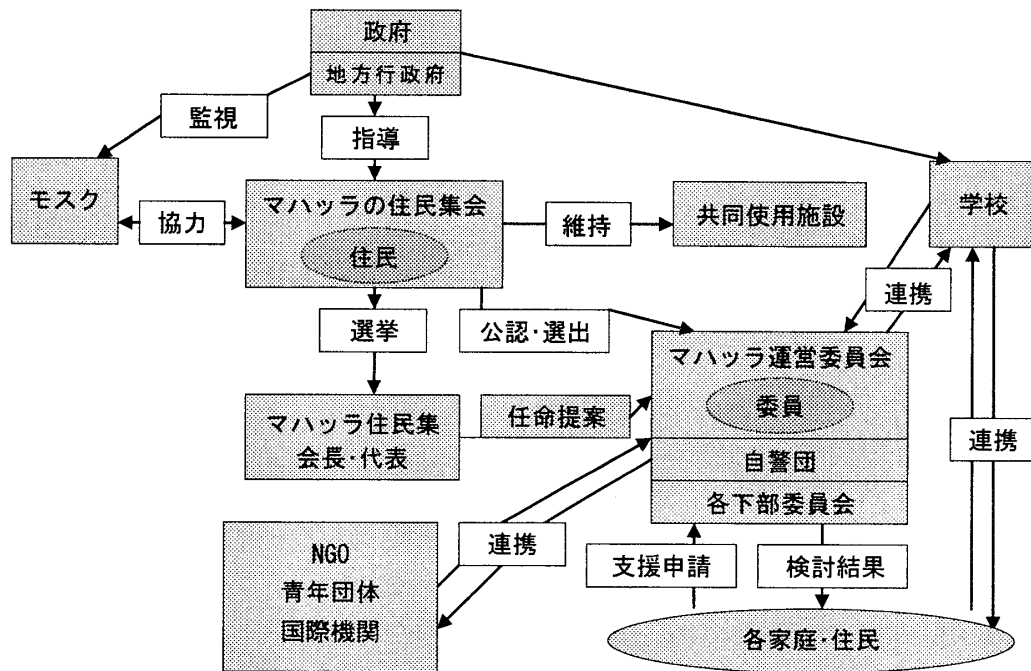


図1：マハッラの構造と組織関係

ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像-中央アジア社会の伝統と変容』東京大学出版会、2006年、125頁を参考に筆者作成。

ウズベキスタンにおけるマハッラの実証的な研究を重ねているダダバエフは、マハッラ社会やそこでの文化を特色付ける要素として「伝統的なマハッラ（「非公式」な人的ネットワーク）」と「『公式』なマハッラ」の2つを挙げている¹²⁾。また、ダダバエフは、ソ連期のマハッラが住民へ社会主義イデオロギーを注入する役割を担わされていながらも、古くからの伝統的側面も保持し続けた点も指摘している。さらに、小松は現在のマハッラについて、その伝統的側面とともに、国際機関やNGOの支援活動の受け皿となっている点¹³⁾も指摘し、現代のマハッラの持つ新たな側面も指摘している¹⁴⁾。これらの指摘は、現代マハッラの機能やマハッラ文化の記述と分析を試みる研究者のあいだにおおむね共有された枠組みであり、それはまた同じく、帝政ロシア期以前からソ連期、そして現代にわたって、マハッラで展開された子どもの生活を特徴づける重要な社会・文化的要素にもなっていると考えられる。

以下では、このような社会的基盤を持つマハッラにおいて、子どもをめぐる通過儀礼や生活がいかに展開していったのかについて、イスラームの伝統や文化、学校教育制度というコンテキストも念頭に置きながら、歴史的観点から検討を行う。

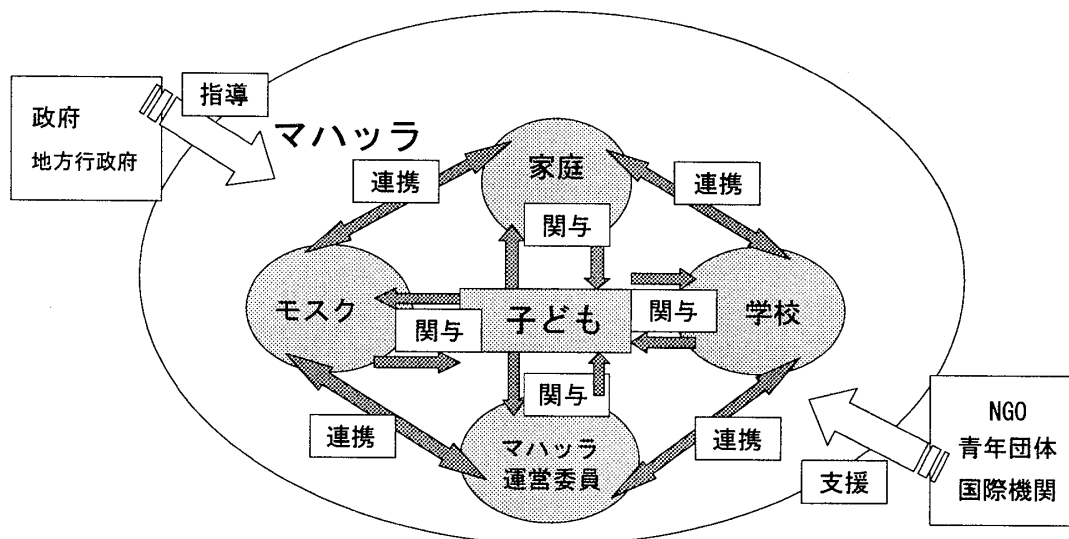


図2：マハッラ内における子どもを中心とした相関図 筆者作成。

（2）帝政ロシア期における子どもの生活

かつて、中央アジアでは人々は都市や農村で、職業や宗教宗派、民族等にまとまって、小さなコミュニティを形成し居住していた。例えば、20世紀初頭のブハラでは、金属関係の職業を持つ者や死体洗浄人はそれぞれの区域に集まって居住しており、このような区域は居住の場であると同時に人々の仕事場でもあった¹⁵⁾。それらのコミュニティは、タシュケントやフェルガナ地方ではマハッラ、ブハラやサマルカンドではグザールという言葉で呼ばれていた¹⁶⁾。

各マハッラにはモスクや聖廟があり、人々は自己の属するマハッラにおいて、通過儀礼や冠婚葬祭に参加し、水利用権等で協力し、相互扶助を行い、同じマハッラの住民という意識を形成・維持してきた。マハッラ内で、何らかのトラブルや紛争が起こると、アクサカル（白髭）と呼ばれるマハッラの長老が紛争処理やその仲介にあたった。このようなマハッラは、19世紀後半から20世紀初頭のブハラ¹⁷⁾にもみられるように、人々の生活上の問題を処理する重要な地域単位となっていた。

帝政ロシアによる教育制度が拡充されるまで、主に男児に対してはモスクに付属したマクタブやマドラサ¹⁸⁾での教育が、女児には主に教師の家で、宗教を中心とした伝統的な教育が行われていた¹⁹⁾。当時の中央アジアにおけるイスラームは、家庭や社会の慣習や成人や子どもの世界観に様々な影響を与えていた。マハッラのモスクでの一日5回のイスラームの祈りの儀式は、体系的に子どもたちの目の前で繰り返され、宗教的な祭日は家庭や社会の慣習が最も鮮明に表出される機会であった²⁰⁾。

また、男児が通う初等学校のマクタブでは6歳から16歳まで（あるいは5歳から15歳まで）の子どもたちが読み書きを習い、そこではイスラーム信仰の精神を基盤とした躰が行われていた。19世紀後半に始まった帝政ロシアの中央アジア進出以前のサマルカンドでは、マハッラやグザールなどの各地域共同体にマクタブが存在しており、なかには女児のためのマクタブもあったという。マ

クタブの教師は、たいてい最寄りのモスクのイマーム（イスラーム僧）がその役を担っていた²¹⁾。ベンドリコフは、その当時のマクタブでの教師と生徒、家庭の関係や祭日に際しての生徒の活動を次のように記述している。

「祭日、特に男児の割礼祭では、教師は両親からムスリムのターバン、スカーフ、ときどきは上衣の贈り物をもらった。両親の贈り物によって、教師はたいてい、とても熱心に裕福な家庭の子どもと一緒に勉強した」²²⁾。

「マクタブでは宗教的祭日が祝われていたが、その際、生徒たちは授業を中断してその祭日のために準備をした」²³⁾。

さらに、著名な詩人や学者、「マジリス」という喜劇団などが参加する集会や討論会が、マドラサや個人の家、職人や商人の店、バザールで行われていたという²⁴⁾。

このように、子どもたちはマハッラの中で、モスクでの祈りの儀式を学んだり、自身のマハッラに関連する職業に触れたり、民族の文化について知る機会を得ていた。マハッラの中で生活することで、子どもたちは生活に密着した宗教や職業、民族に関する知識を学び、社会の一員としての自己認識を育てることが可能であったといえる。この時期のマハッラは、上記のようなインフォーマルな学習が恒常的に行われる場であり、マハッラはそのような学習を支える役割を有していたのである。そして、マクタブやマドラサでの教育が普及していくにつれて、そのようなノンフォーマル教育を支える役割をも併せ持つようになったのであった。

帝政ロシアの時代になると、マハッラはその支配を末端から支えるものとしてみなされるようになった。教育の場でも次第に制度化が進められ、タシュケントでは1866年に男子と女子混合の最初のロシア学校が開校された²⁵⁾。また、1871年の3月、タシュケントの商人であるセイード-アジムバイ・ムハンメドヴァエフが現存するマドラサを批判し、新しいタイプのムスリム学校の開校を提案する報告書を、当時のトルキスタン総督であるカウフマンに提出した。このムハンメドヴァエフの提案を受け、1871年6月には、イシャンクルマドラサに新しい学校を建設する計画準備のため、騎兵大尉であるテレンチエヴァが委員会議長となった²⁶⁾。

このように、帝政ロシア期前後はマハッラの子どもの生活世界での学びが次第に制度化された時代であった。この帝政ロシアの時代においても、以前と同様、マハッラにおけるインフォーマルな学習は存続していたと考えられるが、マクタブやマドラサに代表されるノンフォーマル教育の整備、そして帝政ロシア型の公教育への移行により、それら3者ははっきりと区別されるようになった。

(3) ソ連期における子どもの生活

ソ連期、ソヴィエト政府はそれまでのマハッラの伝統的な仕組みや機能を使い、住民の考え方を「ソヴィエト的」で社会主義的なものへと変え、「ソヴィエト国民」を形成しようとした²⁷⁾。

具体的な政策には、住民の交流の場であり、結婚式や伝統的な祭礼の準備を行なう場所であった、

「チャイハナ」の例が挙げられる。ソヴィエト政府はこの「チャイハナ」を「赤いチャイハナ」へと変え、その場をソヴィエト政府への理解を深めるために利用しようとしたことが知られている²⁸⁾。ムミノフ編集の『サマルカンドの歴史』では、その様子が次のように描かれている。

「ソヴィエトの教員は、将来の Kommunizmus の担い手の教育に自身の力や知識、エネルギーを注ぎ込んだ。教員は学校での緊迫した労働と企業や赤いチャイハナ、クラブ、マハッラでの恒常的な大衆への宣伝活動を両立させていた。1946年のソ連邦最高会議の選挙時だけでも、サマルカンドの3,000人のアジテーターのうち、約500人が学校の教員だった」²⁹⁾。

同書は、ソヴィエト政権下で行われた農業や都市産業、文化活動、国民教育、ウズベキスタンのマルクス・レーニン主義プロパガンダにおけるサマルカンドの学者の活動などが、いかに、ウズベキスタンの近代化に貢献しているかを主張したものであり、当時の共産党の方針やイデオロギーを反映したのもであった。このような著作が、当時の政権の政策的プロパガンダの一翼を担っていたことは明らかであるが、ソヴィエト初期から1960年代までのサマルカンドにおける国民教育政策実施の実態や実際の生徒数、学校数、マハッラでの宣伝活動などが詳述されている部分もあり、非常に興味深い。

ムミノフや他の著作から、マハッラは住民を「ソヴィエト国民」へと形成するための役割を担っており、その伝統的な枠組みを利用し、行なわれた教育内容もソヴィエト政府のイデオロギーを踏襲した住民の近代化、ソヴィエト化を狙ったものであったことが読み取れる。この時期、マハッラはマクタブやマドラサ、そして帝政ロシア期に拡充が行われたロシア学校とも異なる、新しいノンフォーマル教育的な役割を担うことになったのであった。

住民の生活の中におけるインフォーマルな学習は存続していたが、帝政ロシア期、ソ連期を通じて、学校教育の整備を中心とした教育の制度化、教員の活動の広がりにより、マハッラの教育的役割も次第に組織化された部分を多く含むようになってきた。

マハッラを含む社会構造の変化により、そこに居住する子どもたちの生活も大きく変化した。第2次世界大戦期には、疎開した子どもの共和国、州、市、地区レベルの委員会の指導部が設置された。また、同時期に未成年のための孤児院、学習施設なども整備された³⁰⁾。この時期には、幼稚園職員も活躍し、就学前教育に大きな役割を果たしていた。サマルカンドでは、1950年に43の子どもの施設で2,435人の子どもが教育されていたのに対し、1957年はじめには49の幼稚園で3,823人の子どもが教育を受けていたという³¹⁾。

子どもたちの生活に大きな変化を及ぼしたのは、公教育だけではない。ソ連期には、学校外教育の充実も図られ、ピオネール宮殿などの社会教育施設も子どもたちの活動場所のひとつとなっていた。ピオネールは子どもたちに勉強だけでなく、歌や踊り、スポーツなど、多彩な内容を教えた。夏休みになると、子どもたちは約3週間のピオネールキャンプに参加し、同年代の子どもとともに自然や労働について学んだ。

ソ連期と帝政ロシア期の子どもの生活の最大の相違点は、ソ連期においては学校外の子どもの生活の場まで、国家的公的整備が及んだ点である。帝政ロシア期までは、主に学校教育の整備が中心とされ、学校外の子どもの生活に関しては、比較的政府の介入は少なかった。しかし、ソヴィエト期になると子どもたちの生活の場は、マハツラ内のモスクや伝統的なチャイハナを中心としたものから、ソヴィエト型の「赤いチャイハナ」やピオネールの活動の場などへとシフトしていった。

特に、ソ連期の無神論に基づく宗教政策により、モスクでの教育は減少していった。ソ連期の子どもたちは、学校と併せてマハツラ内の「赤いチャイハナ」でも共産主義イデオロギーについての話を教員から聞き、また放課後や長期休暇の際はピオネールの活動に参加するようになった。

さらに、割礼や断食明けの祭り、犠牲祭などの宗教的儀礼や祭り、伝統的なウズベク式の結婚式などは禁止あるいは制限され、代わって「新しい儀礼」の一環として、「コムソモール結婚式」や「赤い結婚式」が導入されるようになった³²⁾。

住民を「ソヴィエト的」で社会主義的な考えを持った「ソヴィエト国民」へと育成するための政策は、子どもたちの日常生活にもしつかりと入り込んでいたのである。

(4) 独立後における子どもの暮らし

独立後の子どもの生活に大きな影響を与えたのは、教育制度や教授内容の大転換であった。学校制度はソ連期に一般的であった、小・中・高一貫の11年制から小・中・高別々の12年制への移行段階にあるが、以前として旧ソ連の11年制の一般教育学校も多くみられる³³⁾。義務教育は小・中・高の12年間であり、12年を終えると、試験を受けて大学に進学することができる。また、飛び級もよく行われている。

言語教育政策に関しては、1989年の「国語法」により、ウズベク語が公用語となったことを受け、1996年の新規初等学校入学者から、ウズベク語の表記も従来のキリル文字からラテン文字表記へと変更され、初等教育段階を主として全ての教科書はラテン文字表記で綴られている。1999年にはウズベク語が国語として必修になるなど、カリキュラムの改革が行われている。しかし、全ての学校がウズベク語のみで授業を行うわけではなく、都市部を中心に依然としてロシア語のみで教授する学校、ロシア語とウズベク語を併用する学校もみられる。

このような表記形式の変更により、現在、大学に入ってから必要となったキリル文字が読めないなどの問題も生じている。また、街中の看板などの表示は依然としてキリル文字表記が大部分を占め、キリル文字表記世代とラテン文字表記世代との間の格差を生んでいる³⁴⁾。

授業では、ウズベク民族の伝統文化を強調する内容が目立ち、英雄叙事詩「アルパミシュ」などの口承文芸、アムール・ティムール帝国の歴史、伝統楽器による音楽の授業、伝統的スポーツ（クラシュ）、マハツラ、春の祭りナウルーズなどが授業で取り上げられ、ウズベキスタンの歴史や英雄、伝統文化の再評価が行われている。

教科書中では、子どもの伝統的な成長儀礼であるゆりかごの祝いや割礼も取り上げられ、「家族の伝統」、「伝統、愛国主義と祖国への愛の発展における伝統の役割」などのテーマで、子どもたち

ウズベキスタンのマハッラ（地域共同体）と子どもの社会化

に学ばれている³⁵⁾。

表1 後期中等教育段階の道徳教育カリキュラム

テ　　マ	時間数	
	(課業) 理論/実践	合計
1.序論、道徳の基礎、概念、成り立ち	2/1	3
2.道徳一人間性の発展、精神的遺産、価値、それらの形態と相互関係	2/2	4
3.宗教と道徳、イスラム教とスーフィズム学習の道徳的完成と人間の問題	2/2	4
4.社会の政治生活、イデオロギーと道徳	2/1	3
5.道徳と経済、それらの相互関係、社会生活発展の維持	2/2	4
6.道徳と教育、知識・専門芸術の選定	2/1	3
7.人類愛、愛国心と平和—道徳の基本的指標	2/2	4
8.自然、人間と道徳	2/1	3
9.マハッラの環境と家族の道徳-国家発展の基礎	2/1	3
10.個人の道徳の外側・内面と相互関係	2/1	3
11.儀式—国家と個人の道徳の反映	2/1	3
12.結論、独立を増強する国民各々の義務	2/1	3
合計：	24/12 (ママ)	40

(出典) Ўрта Махсус, Касъ-Хунар Таълимининг Умумтаълим Фанлари Давлат Таълим Стандарлари ва Ўқув Дастурлари. - Т.:Шарк,2001. - 2126.を参考に筆者作成。

道徳教育においても、イスラームや儀式が授業で扱われている。なお、(課業)理論/実践の部分の合計時間数が不整合であるが、原文通り掲載することとした。

独立後のウズベキスタンにおけるマハッラ独自の活動に関しては、春の祭りナウルーズ (navro'z) や旧戦勝記念日である「追悼の日」(毎年5月9日)、「子どもを守る日」(毎年6月1日)、「女性の日」(毎年3月8日)などに際して、マハッラの広場やマハッラ運営委員会の事務所などで様々な行事が実施され、多くの子どもたちが参加している³⁶⁾。さらに、2003年は大統領令によって「マハッラの年」と宣言され、伝統競技の大会など様々な行事が計画された³⁷⁾。

近年においても、政府の方針によりマハッラと学校の連携活動が奨励されており、ミルゾ・ウルグベク地区171番学校では、12月8日の憲法記念日にマハッラ運営委員会の代表者が招待されたり、「国家独立の理念」の授業にマハッラから代表者が招かれ、「イデオロギー—統一された国旗、社会」のテーマで講義をするなどの活動が実施されている³⁸⁾。その他、「国家独立の基礎」ウィークの際も、マハッラの代表者が参加しての学校行事が開催されている。

ソ連期にその存在や機能が軽視されがちであったマハッラは、独立を経て新国家建設の基盤として蘇り、子どもの教育に関しても重要な役割を果たすとみなされている。これまで旧ソ連政府が行ってきたピオネール活動などの文化や教育に関する取組みは、次第にマハッラや他のNGOなどに移管されるようになってきており³⁹⁾、旧ソ連のイデオロギーに代わる「国家独立の理念」がマハッラを介して子どもたちに伝達されるようになってきている。

特に、近年では学校、家庭、マハッラの連携が強く推進され⁴⁰⁾、マハッラが学校教育に支援・介

入ることが多くなっている。このような現在のマハッラにおいて、子どもはどのように社会性を習得し、伝統文化を継承しているのだろうか。

2. 宗教儀礼とマハッラー2つのハイトにおけるケリン・サロムの観察から

誕生・割礼・結婚・死のような人生の節目に行われる人生儀礼は、国や民族、地域によって多様であり、さまざまな役割や意義を有している。人生儀礼においては、それぞれの儀礼の対象者がどのような地位や立場へ移行するかが提示される。例えば、子どもの誕生時に行われるゆりかごの祝いでは、赤ん坊が周囲の人々に認知され社会へと統合される。割礼祝では男性が正式にムスリムとなったことが儀礼によって表現される。葬式では生者から死者への移行が周囲に認知され、イスラーム独自の儀礼的行為が多く行われ、その宗教性が強く表出される。

また、ウズベキスタンにおける人生儀礼や宗教儀礼は、人間関係を取り結ぶ重要な契機でもある。儀礼で行われる贈答交換や共食・相互扶助は、マハッラを核とした社会におけるネットワーク形成の基盤となっている。例えば、ウズベク人は親族やマハッラの隣人と贈り物を交換し、互酬的なネットワークを形成してきた⁴¹⁾。以降では、マハッラ内の複数家庭において実施した、ラマザン・ハイトやコルボン・ハイトにおけるケリン・サロムの事例を挙げながら、マハッラにおける子どもの社会化や文化継承について検討していく。

ケリン・サロムとは、結婚式の翌日の朝から、花婿側のマハッラの女性たちが集まり、自分たちのマハッラに新たに嫁いできた女性を見にいく、花嫁挨拶の儀礼である。「花嫁見学ケリン・コルデイ、*kelin kordi*」とも呼ばれるこの儀礼では、自身の家に訪ねてきたお客に対し、花嫁はベールを被り3回お辞儀をして歓迎の挨拶をしなければならない。3回頭を下げた後、花嫁はお茶やお菓子をお客たちに勧め、お客をもてなす。現在では、結婚式の翌日と並び、ラマザン・ハイトやコルボン・ハイトの宗教的祭日に合わせて、ケリン・サロムを行う家庭が多くみられる⁴²⁾。

以下では、タシュケント市内の家庭におけるラマザンの観察と合わせて、ラマザンやラマザン・ハイトでのケリン・サロムにおける子どもの社会性習得や文化継承について検討していく。

1) ラマザンとマハッラータシュケント市内の家庭におけるフィールドワークから

イスラーム暦の9月で、断食月にあたるラマザン期間中には、様々なしきたりがみられる。筆者が後期中等教育の10年生と前期中等教育の5年生の2人の男の子の家庭をお客として訪問したのは、ラマザンの終わりごろで、数日後にラマザン・ハイトを控えた時期であった。

筆者を招待したタシュケント在住のUさんは、大学事務員として午前中だけ働く30代の女性である。一家は、父親と母親であるUさん、前述の二人の男の子の4人家族であり、タシュケント市内の旧市街の大きなバザールに程近い9階建てアパートに住んでいる。もともと2戸分のアパートを1戸に改築したもので、部屋数は非常に多い。半分を改装しており、もう半分の改装はまだである。家具や家電製品なども非常に高価なものが揃っており、大きな日本車を1台所有していることから

も、ウズベキスタンの中で裕福な家族であることが見て取れる。家庭内で使用している言語は主にウズベク語であるが、父親、母親、上の息子はお客によって、使用言語を使い分けているようである。

Uさん自身は、ラマザン中は禁止されているタバコを特に気にすることもなく吸うような、いわゆる「ロシア化された現代的なウズベク人」の一人である。ラマザン中であるのでタバコは吸わないのではなく、彼女の場合は「ラマザン中で、夫がモスクで一晩中お祈りをするので、夫に隠れることもなくタバコが吸える」という。このような彼女の家庭でも、子どもに対する躾は厳しく、日中の断食は厳密に守られている。断食の最中、家族全員が日中は水も飲まず、子どもたちも忠実に断食を実施していたのである。「冬にラマザンがあるときは、楽なのよ。日が短いし、暑くないし。夏のときは大変。日が長くなるし、暑いから水を飲みたくなるし。ラマザン中は、太陽が出ているときは水も飲んではいけなから」とUさんはラマザン時の苦勞について述べる。

Uさん一家は朝4時に起き、朝食を食べた後お祈りをし、その後は日の入りまで何も食べないという断食をこのラマザン中、ずっと続けているという。筆者が家庭を訪問したときは、お茶や果物、水、卵の白身と砂糖などで作る甘い水飴状のもの、ナンと呼ばれるパンなどがテーブルに並べられていたが、誰も食べる者はいなかった。静かに、日の入りの時間が過ぎるのを家族全員で待っているのである。

午後6時を過ぎ、父親が短いお祈りを唱え始めた。2人の男の子たちも静かに父親のお祈りを聞いている。お祈りが終わると、まず全員が水を少し飲む。それから、果物など自然のものをはじめに食べる。お茶を飲みナンを白いジャム状のものにつけて食べる。しばらくすると、母親が作ったプロフが運ばれてきた。普段の料理が出てくると、断食後の緊張も解けたようで、その後は自由に賑やかに夕食を食べる。

その後、夜8時頃、父親は一晩中続くマハッラ内のモスクでのお祈りに出かけていった。近所の子どもたちのなかでもモスクに行く子がいるようで、下の息子には、しきりに友達から電話がかかってきたり、家に呼びにきたりしている。息子はモスクに行きたがったが、母親は「まだ小さいので」と行かせなかった。息子の方は自分一人だけモスクに行けないことが残念であったようだ⁴³⁾。

このように、ラマザン中、子どもたちは毎日両親とともに祈りをし、断食をしながらイスラームを中心とした宗教や文化を学ぶ。朝晩、両親の祈る声を聞きながらコーランを知り、日中の断食後まず食べていいものはなにか、またなぜそのようなしきたりがあるのかななどを、両親を模範として学んでいくのである。また、当該家庭の子どもたちはモスクには行かなかったが、男児を中心にモスクに集まり、宗教的儀礼に触れ、イスラームを学ぶとともに、マハッラ内で子ども社会や大人社会の人間づきあいや規律、習慣を学ぶ子どもたちもいる。

特に、モスクでは男性のみが集まって祈りを行う点、イスラームを信仰する中央アジア系民族が多く集まるという点、独立後にこのような宗教儀礼を公に催すことが可能になった点などから、子どもたちがイスラームに基づく性別役割分業やエスニシティ、独立後の時代性を学ぶ重要な機会となっている。このようなマハッラでのラマザンは、宗教や伝統文化継承の場だけでなく、子ども

たちの社会化の機会が凝縮された場であるともいえる。

以下では、断食明けの祭りラマザン・ハイトと犠牲祭であるコルボン・ハイトにおけるケリン・サロムについて検討していこう。

2) ラマザン・ハイトとコルボン・ハイトにおけるケリン・サロム

ラマザンにおける訪問から数日後、断食明けの祭り、ラマザン・ハイトが催された。ラマザン・ハイトを観察した一家は、タシュケント市内のユヌサバッド地区にあるアパート群の5階に住んでいる、父、母、息子、2人の娘の5人家族であり、今回も筆者はお客として訪問した⁴⁴⁾。筆者を招待した母親のMさんは大学のベテラン教員としてロシア語やウズベク語を教える40代後半の女性である。

ラマザン・ハイトの際は、ケリン・サロムという花嫁挨拶の儀礼が行われることが多い⁴⁵⁾のは前述の通りで、Mさんのマハッラの新婚家庭でもケリン・サロムが行われているという。「年齢が大きい男性は、ケリン・サロムには行かない」という長男を残し、Mさんと下の娘さんとの女性ばかりの3人でケリン・サロムを行っている家庭を訪問した。花嫁がいる部屋に入ると、花嫁が金色で装飾されたベールを被り、お辞儀をしてお客を迎えていた。一人のお客に対し3回頭を下げなければならず、どんなに小さな子どもに対してもきちんと頭を下げるという。その後は、花嫁からお茶を注がれジュースやお菓子を食べる。テーブルの上には、ウエディング姿の花嫁をあしらった大きなケーキや果物が並んでいる。

お客は続々とやってきて、花嫁はそのたびにお辞儀を繰り返す。なかには、母親に連れられて小さな女の子の赤ん坊や2人の男の子たちもやってきていた。年輩の女性が来るたびに、部屋の全員が立ち上がって女性に近況報告などの挨拶を行うが、2人の男児も年輩の女性の傍に寄り、挨拶をした。新しいお客が来るたびに、子どもたちの目の前では短いお祈りが繰り返され、2人の男の子たちも手を胸の前で合わせ、お祈りを静かに聞いていた。お祈りが済んだあとの談笑中には、「お茶を注いでもらった際やお菓子を取ってもらったときは、きちんとお礼をするのよ」と年輩の女性が男の子に教える声も聞かれた。

ケリン・サロムは、ラマザン・ハイト時のみ行われるわけではない。イスラームの移動犠牲祭である、コルボン・ハイトの祭日にも多くの新婚家庭でケリン・サロムが行われる。筆者がアカデミックリセで働く教師とともに訪問したマハッラ内の家庭でも、秋に結婚した息子の花嫁がケリン・サロムを行っていた⁴⁶⁾。

しばらくすると、初等教育段階ほどの近所の子どもたちが6人、花嫁見学にやってきた。そのうち4人は女兒で、2人は男児である。花嫁は、白いレースのベールを被り、子どもたちに向かって3回お辞儀をする。子どもたちは静かに花嫁を見守り、身動きもしない。花嫁は3回のお辞儀を終えた後、子どもたちにお茶を配り始めた。子どもたちは静かに差し出されたお茶を受け取り、お菓子とともに飲んでいる。

一緒に座っている中での年長者の20代の女性が場の会話をリードし、「今、何年生?」、「お母さ

んやお父さんは元気？」などの質問を子どもたちに投げかける。子どもたちは、ゆっくりと1つ1つの質問に答える。その間も花嫁は、お茶がなくなった子どもにお茶を注ぐ。会話や飲食がひと段落すると、最年長の女性がお祈りを唱え、解散となった。

ケリン・サロムが行われていた家庭からリセ教師の家庭に帰ると、一緒にケリン・サロムに参加していた2歳の女兒が白いレースのカーテンへよちよちと歩み寄って行き、頭にそのカーテンを被ってケリン・サロムの花嫁の真似事を始めた。祖母や母親が「よくできたね。花嫁さんだね。ケリン・サロム!ケリン・サロム!」と話しかけると、花嫁同様、お辞儀を始める。子どもたちの目の前で複数回にわたって体系的に繰り返されたケリン・サロムは、1次的社会化段階にある2歳児にも、様々な影響を及ぼしていたと考えられる。

ケリン・サロムにおける子どもたちと花嫁、女性客たちとの関係に着目すると、既述のモスクでのお祈りの事例との間に、ある共通性や類似性がみられる。それは、花嫁や女性客たちはケリン・サロムに参加した子どもたちに、宗教や伝統文化、公の場での礼儀などを伝達する世代的、ジェンダー的役割を有しており、一方子どもたちはその主体的な受け手となっている点である。また、ソ連期には制限されていた宗教儀礼の復興を子どもたちに伝達するといった時代性、イスラームを信仰するウズベク民族をはじめとした中央アジア系民族の「われわれ意識」に基づくエスニシティなども、ラマザンにおけるモスクでのお祈りと2つのハイトでのケリン・サロムに共通する点である。

一方、行政的なレベルにおいて政府はマハッラでのイスラーム信仰の管理を、ムッラーを通じ行おうとしている。現在、ムッラーとしてマハッラ内で活動する場合は、国家が規定する場所で研修を受け、修了証明を受け取る必要があるという。また、マハッラの代表は自身のマハッラの状況に関して区行政府と逐次連絡を取り合ったり、会議に出席する義務があり、各マハッラの現状は区行政府を介し、国家に監視されているとされる⁴⁷⁾。1998年には「豪華な挙式や家族の祝事の禁止」という大統領令が制定され、人々の宗教儀礼や人生儀礼には、さらに様々な制約がかけられるようになった⁴⁸⁾。

このような政策と相まって、現在はケリン・サロムを行わず、その費用を冷蔵庫やその他の家電製品、新婚旅行費などとして贈る両親や、それらを欲しがるといふ若い夫婦も多いという。「その日限りでなくなるハイトの料理よりも、後に残り生活に役立つ冷蔵庫などが重宝されている」そうである。また、現在では、現代的なウズベク民族の家族が増え、ケリン・サロムでの料理のもてなし方にしても、ウズベク式にテーブルの上にとり狭しと料理を並べず、ヨーロッパ式に一皿ずつ出す家庭も増えているようである⁴⁹⁾。

ラマザン・ハイトに招待してくれた前出のMさんは、「伝統的な文化は大切だけど、今の若い人たちはそう考えない人もいる。時代は変わっていくから。私の上の娘は、面白いし、人生に一度だけのケリン・サロムだから家電製品よりもハイトのケリン・サロムの料理を選ぶ、と言っているけど」と述べる。政府による文化や宗教政策、住民の生活の近代化などに起因して、現在のウズベキスタンの宗教行事は次第に変容しつつある。

おわりに ― 子どもの生活世界と「支援者」、「介入者」としてのマハツラ

現在のウズベキスタンにおけるマハツラ内の儀礼における子どもたちの行為から、子どもたちは宗教儀礼において、イスラームを核とした宗教、ジェンダー、エスニシティ、世代、時代性という規範や価値を学んでいることが明らかとなった。そして、それらはラマザン中のモスクでのお祈りやハイトのケリン・サロムでの宗教儀礼において、家族や親戚間だけでなくマハツラ住民との相互関係において行われていた。子どもたちはマハツラ内で催される各儀礼のなかで、自身の生活する社会における規範や価値を学び、社会化や文化継承を能動的受動的に行っているのである。

しかし、その反面このような儀礼における子どもたちの学びは、イスラームに根ざしたジェンダーやエスニシティ、世代、ポストソヴィエト時代という社会的制約を受けているとみなすこともできる。モスクやケリン・サロムの儀礼で、人々は女性や男性、ウズベク民族や他民族、子どもや高齢者、そしてソ連期とは異なり宗教儀礼の復興が可能となった時代に生きるムスリムとしての役割を演じることが周囲からも期待されている。それは、様々な儀礼においてしばしば宗教的なフォークウェイズとして垣間見ることができる。

このような儀礼における社会的制約と現在のウズベキスタン政府が推進する文化、宗教、教育政策を注意深く観察すると、政府の国民育成の意図が見えてくる。

割礼や結婚式が執り行えない貧しい家庭に地区行政府が金銭的人的支援を実施したり、割礼のやり方についてマハツラの代表者を通じ、各家庭に指導を行うなどの面では、マハツラは儀礼や子どもの生活世界に対する「支援者」といえる。

しかし一方で、マハツラは政府の意向を受けた「介入者」の側面も持ち合わせている。豪華な祝宴を行おうとする家庭には規模や金銭面での制限を行い、マハツラ内で突出した祝宴が行われないよう牽制することで、宗教儀礼やそこでの子どもの社会性習得や文化継承に「介入」していると考えられるのである。国家によるムッラーやマハツラの管理、宗教儀礼の学校教育への導入についても同様のことがいえる。

この背景には、イスラームを核とした国民の育成、ひいては国家統合を企図する政府の政策が見え隠れしている。イスラム原理主義などの過激な宗教勢力の勃興を抑え、人々の生活世界に収まる範囲の宗教を認め、中央アジア系民族を纏め、国家建設を進めていこうという狙いである。この意味において、現在のウズベキスタンにおけるイスラームは、「形式や方法においては伝統的、内容においては国家主導型」の宗教であるといえ、それによりウズベキスタン人という「われわれ意識」の再生産を目指したものであった。ここに、国家と儀礼、国家と宗教の関係における複雑な諸問題が包含されているといえよう。

本論では主としてイスラームに基づく儀礼や伝統文化を取り上げてきた。しかし、多民族国家であるウズベキスタンにはイスラームに依らない伝統文化や儀礼が他にも多数存在する。ウズベキスタンの春の祭りであるナウルーズや、ソ連期以降に新年行事として祝われるようになったヨールカ（クリスマスツリー）の風習など、様々な行事や儀礼が子どもの社会化や文化継承に多大な影響を

与えていると考えられる。

今後は、それらの諸文化を国家政策と照らし合わせながら、ウズベキスタンのマハッラにおける子どもの生活の諸相や、社会化、文化継承について研究を進めていくことが課題である。

<註>

- 1) ティムール・ダダバエフ『マハッラの実像—中央アジア社会の伝統と変容』東京大学出版会、2006年、99頁。
- 2) 藤本透子「カザフスタン/子どもの成長儀礼にみるイスラーム」『アジア研ワールド・トレンド』No.85、2002年、18頁。
- 1.
- 3) ダダバエフ、前掲書、2006年、1頁。
- 4) 小松久男「カシュガルのアンディジャン区調査報告」、清水宏祐（編）『イスラム都市における街区の実態と民衆組織に関する比較研究』東京外国語大学、1991年、46頁。
- 5) Арифханова З. Махалля – Традиционный орган самоуправления населения в прошлом и настоящем. // Демократлаштириш ва инсон ҳуқуқлари. – Т.: Инсон ҳуқуқлари бўйича Ўзбекистон Республикаси миллий маркази, 2003. - №1(17). – С.137.
- 6) ダダバエフ、前掲書、2006年、29頁。
- 7) Elise Massicard & Tommaso Trevisani “The Uzbek Mahalla”, *Central Asia: aspects of Ttransition*, edited by Tom Everett-Heath, 2003, Lodon, pp. 206.
- 8) ダダバエフ、前掲書、2006年、9、232、242頁。
- 9) タシケント市シャイハンタフル地区チョポンアタマハッラ代表アンバロフ・ハニド氏へのインタビューによる（2006年5月24日実施）。同マハッラには、トレーニング機材が揃ったスポーツ施設やサッカー場、テニスコートなどが整備されており、ハニド氏によると同地区の49のマハッラの中で最もスポーツの盛んなマハッラであるという。
- 10) アフンババエヴァマハッラ代表（当時）サタロフ・アハト・サタロヴィッチ氏へのインタビューによる（2007年3月10日実施）。
- 11) ダダバエフ、前掲書、2006年、125頁。グリスタンマハッラ女性委員会顧問ベルディーワ・マヒラ氏、ユルダーシェバ・ラノ氏（2006年4月15日実施）、アフンババエヴァマハッラ元代表カラバエバ・グルジャホン・イブラギモブナ氏（2006年4月26日実施）へのインタビューによる。
- 12) ダダバエフ、前掲書、2006年、103頁。
- 13) 詳しくは、Aline Coudouel, Sheila Marnie and John Micklewright “Targeting Social Assistance in a Transition Economy: The Mahallas in Uzbekistan”, *Occasional Papers Economic and Social Policy Series EPS63*, UNICEF, 1998. を参照。

- 14) 小松久男「マハッラ」小松久男他編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年、484頁。
- 15) ダダバエフ、前掲書、2006年、49-50頁。O.A Сухарева, «БухараXIX—началоXXвв.» – М.: Наука, 1966. - 325-326с.
- 16) マハッラの起源や成立過程には様々な主張があり「親戚の居住区域が時とともに拡大していったことによるもの」とする見解（リズワン・アブリミティ「ウイグルの子どもの発達におけるマハッラ（地域共同体）の役割」『日本生活体験学習学会誌』（1）、2001年、40頁や、太い灌漑水路から枝分かれした各水路にオイと呼ばれる各戸が集まりマハッラがつくられたとし、その成立過程を説明しているものもある（真田安「都市・農村・遊牧」佐藤次高編『講座イスラム3イスラム・社会のシステム』筑摩書房、1986年、116-117頁）。
- 17) 小松久男「ブハラのマハッラに関するノート—O.A.スーハレワのフィールド・ワークから—」『アジア・アフリカ言語研究』16、1978年。
- 18) マドラサは、イスラーム世界における伝統的教育機関であり、その起源は20世紀のイラン東北部とされる。マドラサは私有財産のみから成るワクフ（慈善を目的としたイスラームの寄進制度）対象物件とされ、私立学校としての性格を有していた。マドラサでは、学生たちはまずアラビア語をアルファベットから学び、それを習得すると倫理学に入り、最終的にはイスラーム法学を修得する、というような単線型のカリキュラムが採用されていたという（小松久男他編、前掲書、2005年、479、483頁）。
- 19) К.Е. Бендриков «Очерки по истории народного образования в Туркестане.»– М.: Наука , 1969. –27–60с.
- 20) Там же, 28с.
- 21) И. М. Муминов и др «История Самарканда» Том первый –Т.: Фан, 1969. – 293с.
- 22) К.Е. Бендриков «Очерки по истории народного образования в Туркестане.»– М.: Наука , 1969. – 41с.
- 23) Там же, – 41 – 42с.
- 24) И. М. Муминов и др «История Самарканда» Том первый –Т.: Фан, 1969. – 290с.
- 25) К.Е. Бендриков «Очерки по истории народного образования в Туркестане.»– М.: Наука , 1969. 61с.
- 26) Там же, – 69 – 70с.
- 27) ティムール・ダダバエフ「中央アジア諸国の現代化における伝統的地域社会のあり方と役割—ウズベキスタンの『マハッラ』を中心に—」『東洋文化研究所紀要』146、東京大学東洋文化研究所、2004年、257-258頁。
- 28) ダダバエフ、前掲書、2004年、259頁。
- 29) И. М. Муминов и др «История Самарканда» Том первый –Т.: Фан, 1969. – 292с.
- 30) Там же, 227с.
- 31) Там же, 295с.
- 32) ダダバエフ、前掲書、2006年、69頁。これまでの伝統的な結婚式に代わり、若者たちはスー

ツとウエディングドレスを着て、隣同士に座り、結婚式を執り行うようになった。

- 33) 現在、タシケント市は11年制義務教育から12年制義務教育への移行の最終段階にあり、11年制義務教育の旧学校制度による教育を受けた11年生は市内の43校に在学するのみとなっている。旧学校制度による10年生は既におらず、初等教育（1-4年）、前期中等教育（5-9年）、後期中等教育（10-12年）への転換が進められている。タシケント市は、2007年から2008年にかけて、12年制義務教育の新学校制度へ完全移行予定である（タシケント市人民教育局局長ミルタジエフ・ダブランベク・トゥルスノヴィチ氏へのインタビューによる。2007年12月13日実施）。
- 34) 例えば、2007年12月23日に実施される大統領選挙に際し、候補者の紹介や国民に投票を呼びかけるポスターなどの大部分はキリル文字で表記されている。
- 35) В.А. Костецкий «Азбука этики4 класс» –Т.: Национальное общество философов узбекистана, 2007. –87с.; В.А. Костецкий и др «Чувство Родины6 класс» –Т.: Yangiyul Poligraph Service,2007. – 51-52с.
- 36) アフンババエヴァマハッラ代表（当時）サタロフ・アハト・サタロヴィチ氏、元代表カラバエバ・グルジャホン・イブラギモブナ氏（2006年4月26日、2007年3月10日、5月4日実施）、グリストアンマハッラ女性委員会顧問（2006年4月15日実施）、オク・ウイマハッラ前代表（2007年6月7日実施）、ЛСАシニアボランティアへのインタビュー（2007年3月19日実施）による。
- 37) Ўзбекистон «МАҲАЛЛА» хайрийжамғармаси, “МАҲАЛЛА”, 2003.
- 38) タシケント市ミルゾ・ウルグベク地区171番学校内部資料。171番学校副校長バリエヴァ・イルミラ氏へのインタビュー（2006年3月10日実施）。
- 39) 例えば、現在のウズベキスタンでは青年を対象とした道徳や精神性、伝統文化、愛国心、市民意識の育成講座や国際会議が様々な青年団体やNGOなどによって開催されている（Маънавият ва маърифатタシケント市局長へのインタビュー2007年12月13日実施、カモロット国際関係・パブリックコミュニケーション課チーフ、アリムバエフ・ムロディラ・ムハンマダミノヴィチ氏へのインタビュー2008年1月7日実施、市民社会研究所所長ウスマノフ・マリフジャン・シャキロピチ氏へのインタビュー2008年2月20日実施による）。また、立法サイドの1議員は子どもや青年に対する公德心、伝統文化、愛国心の育成方法として、1.学校教育での道徳科目の充実、2.伝統的祭日における子どもや青年の参加促進を挙げた（ウズベキスタン共和国上院議員科学・教育・文化・スポーツ問題委員会上院議員に対するインタビューによる。2008年2月19日実施）。
- 40) Ўзбекистон Республикаси Халқ Таълими Вазирлиги., Йўлдошев Х.Қ., Баркамол Авлодни Тарбиялашда Оила,Маҳалла,Мактаб Ҳамкорлиги Концепцияси. – Т.2004. - 76.（「成熟した世代育成における家族、マハッラ、学校の連携」コンセプト）

2.

- 41) 小松久男他編、前掲書、2005年、267頁。

- 42) ユヌサバッド地区の家庭における参与観察2007年10月13日実施、タシケント州キブライ地区ウイマウトマハッラの家庭における参与観察（2007年12月19日実施）による。
- 43) タシケント市セスリギマハッラの家庭における参与観察（2007年10月8日実施）による。
- 44) ユヌサバッド地区の家庭における参与観察（2007年10月13日実施）による。ケリン・サロムに外国人として参加することは調査対象家庭にも基本的に喜ばれたが、それ以上に外国人への文化紹介という名目で、典型的なケリン・サロムの儀礼を再現してもらえるメリットがあった。それは、ケリン・サロムの形式的特徴を把握する上でも、また儀礼後の談笑時の雰囲気との比較を行う上でも、非常に有意義なものであった。
- 45) ラマザン・ハイトやクルヴァン・ハイト時にはケリン・サロムのような祝事だけではなく、故人の冥福を祈る儀礼も行われる。この儀礼では、マハッラ住民はお祈りのために故人宅を訪れるだけでなく、訪問客を迎えもてなすための重要な支援者ともなっている。
- 46) タシケント州キブライ地区ウイマウトマハッラでのケリン・サロムにおける参与観察（2007年12月19日実施）による。
- 47) 高橋巖根『ウズベキスタン 民族・歴史・国家』創土社、2005年、148頁。
- 48) 割礼に関しても、同様の事例が指摘できる。マハッラ運営委員会は、経済的な事情から割礼祝いができない家庭に対しては支援を行い、豪奢な割礼祝いをしようとする家庭には制限をかけるといふ。これは、どの家庭も平等に、均一のレベルの祝宴を催すようにとの考えによるものだそうである。（タシケント市ユヌサバッド地区行政、アブドゥラヒモヴァ・ニゴラ・ラヒムナノヴァ氏へのインタビュー、2007年12月11日実施）による。それによると、同地区では2007年に7つの貧困家庭の割礼祝いに対する支援が行われたという。また、その他結婚式などに対しても金銭的・人的な支援が実施されている。
- 49) ユヌサバッド地区の家庭における参与観察（2007年10月13日実施）による。

Uzbekistan's *Mahalla* (Local Community) and Socialization of Children
- Focusing on the Acquisition of Sociability and Cultural Succession Based on Islam

Asuka KAWANO

The children of Uzbekistan grow through various initiation ceremonies and traditional festivals from the moment they are born. Such ceremonies are based largely on Islam. For example, the circumcision (*sunnat to 'y*) where a boy is circumcised at a Muslim's home is celebrated on a grand scale, as are marriage ceremonies. Before and after a circumcision, the owner of the house serves meals to visitors, such as relatives and neighboring residents.

In such cases the participation of the residents of the *mahalla* (traditional community) is indispensable. Thus, children grow by passing through various rites of passage, such as circumcision, the naming ceremony, and ceremonies after their birth. They then come to accept these as a respectable adult.

However, the naming ceremony, the congratulations (*beshik to 'y*) of a cradle, and circumcision are performed by parents, relatives, and *mahalla* residents wishing for the happiness brought about by the healthy growth of the child. Moreover, it is also designed for the parents to maintain their own social appearances in an area. Owing to the ceremonies performed for children during their infancy, children's spontaneity and autonomy are seldom seen.

In contrast with this, children learn sociality and traditional culture more spontaneously and actively in *ruza hayitm*, funerals, *qo'rbon hayit*, and marriage ceremonies. Children learn religion and traditional culture through participation in the various customs within *mahalla*. Children learn not only this, but also learn about human relations in child society and adult society, order, customs, and more.

The process of studying and mastering the norms, value, and original culture where one lives is called socialization. Social structures and religious traditions, traditional cultures, and the natural environment all have enormous influence on the process of socialization. In the society of Uzbekistan as well, a child's socialization process is based on the religious traditions of the country, and the unique culture of the country. In addition, the social structure centering on *mahalla* affects important social and cultural factors.

This paper focuses on the various aspects of life in the traditional culture in *mahalla* and the children based in the cultural and religious background of Islam and the social structure of Uzbekistan. It clarifies the following points.

1) The process of children's socialization and the process of cultural succession in the religious customs in the lives of children and *mahalla*. 2) Participation of *mahalla* in socialization and cultural succession of children.

Similarities are seen in the relation between the children and brides and female guests in *kelin salom*. In *kelin salom* brides and female guests convey religion, the customs in traditional culture, and a public forum to

the children who participate. Conversely, the children serve as the active recipients.

From children's taking part in the customs of *mahalla* in present-day Uzbekistan in religious ceremonies it is clear that children learn about the norms and values of the religion, as well as gender, ethnicity, generation, and historical characters which take Islam as their core. These are performed through religious ceremonies in correlation not only with their family and relatives, but also with *mahalla* residents.

In each ceremony held within *mahalla*, children study the norms and values of the society in which they live, and engage in socialization and cultural succession both actively and passively. On the other hand, it can also be considered that learning by children in such ceremonies is bound by social restrictions such as gender, ethnicity, generation, and the Post Soviet era rooted in Islam.

In a mosque or ceremony, woman and man, Uzbekistanis and other ethnicities, and children and elderly people are expected to play their roles as Muslims. In various ceremonies, oftentimes a glimpse can be caught of a religious divergence.

Against this background, the policies of the government which plan to train the people using Islam as the core, thereby resulting in national integration can be glimpsed from time to time.

The government is aiming to suppress the sudden rise of excessive religious influence, such as Islamic fundamentalism, accept the religion in the sphere of people's lives, consolidate the ethnicities of Central Asia, and advance nation building. This aims to revive a "consciousness" of the people from Uzbekistan. Many complicated problems in the relation between the state in present Uzbekistan, ceremonies and the state, and religion are incorporated within this.